

「安曇族」概念のルーツとその拡大

刈間 健志

旧安曇郡内に住んでいる人で「安曇族」という言葉を耳にしたことがない人などいないのではなかろうか。それほど「安曇族」は安曇平の人々にとって馴染み深い存在である。だから、ここで私が唐突に「安曇族」は歴史上存在しなかったと言ったら、とても信じてもらえないであろう。しかしこの十年余りの間、違和感だらけの安曇野の古代史と格闘し、ようやく見えてきた結論は「安曇族」など最初から存在していなかったのではないかという疑いである。

一方、安曇野の人たちが当地の歴史を語るとき、口を突いて出てくるほど「安曇族」という概念は定着しているように思われる。何故「安曇族」概念は常識化・日常化するまでの広がりを持ちえたのだろうか。

「安曇族」概念を世に広く知らしめるきっかけを作ったのは、「安曇族」概念の媒介者で、『穂高神社史』においてこの概念の性格付けを行った宮地直一博士であろう。宮地氏による「安曇族の信濃植民説」は神社関係者のみならず郡史・市町村史にも大きな影響を与えた。

弥生時代以降、信濃へそして安曇平へやってきて我々の祖先となったのはどんな人々だったのか。開発後進地の安曇平に突然安曇郡が置かれたのはなぜなのか。都から遠く離れ、史料にも乏しい地方の古代史。その空白を埋めてくれる「安曇族」概念は、郷土史家にとって誠に重宝な存在に映ったことだろう。

開国からまだ時浅い日本で、実証史学や考古学・人類学・民俗学など人文アカデミズムのほとんどの分野が創始されたばかりという状況下、内務省神社局に籍を置き、大学教授も務めた宮地博士の影響力は抜群に強力であったと思われる。『穂高神社史』を参考に博士の唱えた「安曇族」論の真の狙いについて紐解いてみたいと思う。

「安曇族」概念への素朴な疑問

『穂高神社史』で紹介されている「安曇族」の基本概念は現在も様々な論者によって引用され、様々な解釈がなされている。戦後70余年の間に考古学上の発見、技術の発展などにより様々なトピックも提供されている。しかし、殊「安曇族」論の中心的な課題に至ってはこの70年余りほとんど何の進展もない。極論すれば3つの課題、すなわち「北九州安曇族」「信濃安曇族」「宮廷貴族の安曇氏」この三課題に収束すると言ってもよい。この三者の間には空間的な隔りがある上に時間的にも500～1000年近い隔りがある。にもかかわらず、安曇族の民族的性格をいくつかの基準で分類し定式化しようとする試みが当初からなされてきた。空間は船を漕ぎ山を掻き分ければたどり着けないこともないが、500年1000年という時間はそう簡単に乗り越えられるものではない。20年を一世代と考えても500年で25世代、1000年で50世代。近親婚を繰り返しながら人口を増やしていったと考えても、当時数十万から二、三百万規模の西日本全体の人口すべてが先祖や子孫となる程度の世代数であることを考えると「族」という纏まりを保ち続けられたかどうか大変疑わしくなる。王家や氏上家という特定の血筋の継承を想定した場合においても、500年～1000年の間には家筋がいくつにも分岐し、主従関係も複雑となって、内紛などで絶えてしまう恐れもある。さらに言えば、志賀島のような文化交流の盛んな地域で長期にわたり数多くの政争を潜り抜け独り栄華を欲しい儘にしてきたなどとても信じがたいことである。

その一方で志賀島に海神を祀り、海部集団と周辺地域を支配下に治める奴国の長としての栄光がなかったとしたら、信濃に「安曇郡」の名がつく機会が失われてしまう、とするのが「安曇族」論のアキレス腱にもなっている。そもそも文字文化すらなかった弥生(想定によっては縄文)時代に、「安曇」の氏族名と正しい系譜をどのように継ぎ続けることができたのだろうか。分け入れれば分け入るほど様々な矛盾と疑問の渦に飲み込まれしまう。この違和感はいったいどこから来るものなのだろうか。

「安曇族」概念の定義

「安曇族」の定義とその性格付けについては『穂高神社史』第一章「安曇の氏人」に纏めて紹介されている。また第二章「穂高の環境」では信濃安曇族について活動範囲や考古学に

照らした知見が詳細に述べられている。一章二章に述べられた安曇族の活動圏や生活習慣、祭祀などを「安曇族」の定義、「安曇族」の具体的なプロフィールと見てよかろう。その内容を簡単に整理するとともに私なりの疑問点を挙げておきたい。

1. 「安曇族」とは「安曇系海神族」の略称で「安曇氏および部曲の民」を意味する？

第一章には「安曇族」という表記が11箇所あるが、その冒頭で「安曇系海神族」を「安曇氏および部曲の民」と言い換えていることから「安曇族」の意味するところが何となく伝わってくる。ここで宮地氏が強調するのは「権威者である安曇氏と部曲の民との主従関係は世襲的で、同じ信仰によって結びついた『家長制部族団体』であった」とする点である。伴造氏族への部曲の隷属は氏姓制度の始まった四、五世紀ごろを上限と考えられているが、安曇氏と部曲との世襲的關係はそれ以前にまで遡るのだろうか。全体の流れを見ると、宮地氏の想定する時代はおそらく奴国以前まで遡ってのものだと思われる。だから単純に安曇系海神族=安曇族と言い換えられない含みもあるようだ。

2. 「安曇族」は祖神として「綿津見神」を祭祀する

祖神とは裔孫である「安曇族」の直接の先祖、という意味である。「人格神としての血縁神観を完成し祖神対裔孫といふ信仰を具現したところに他に区別すべき特色をみせている」とし、安曇族にとって綿津見神は実在の祖先のような扱いであつたらしい。明治政府の官僚であり、信仰心も篤かった宮地氏が神話上皇室に最も近い血縁の氏族をこう評することに特段の驚きはない。しかし祖神と裔孫の關係を強調することに特別の意味があるとすれば、綿津見神の実在を前提にして「安曇族」(特に安曇部と祖神との關係において)に実在感を与えることである。そもそも綿津見神を祖神とするのは記紀神代記に記された綿津見三神裔の阿曇連と新撰姓氏録に記録された安曇連、安曇宿禰を含む七氏族だけである。安曇部や海部までが綿津見神の裔孫であるとするにはもともと限界がある。さらに押してその血縁を主張するのであれば、せいぜい初期天皇時代くらいを下限としなければ「安曇族」の存在そのものが疑わしくなってしまうだろう。下限を延長するには信仰上のリアリティーが必要なのである。

なお第一章では安曇連を地祇系「綿津見命」裔として紹介する他、天神系「天造日女命」裔として旧事記の内容を紹介している。天神系への考察はないが意図的に無視した観も否めない。

3. 「安曇族」は志賀島に綿津見三神を祀り、筑前国糟屋郡を本拠とする

北九州は安曇族の本拠とされ、いつの頃からかここから全国に向けて旅立ったとされる。大阪湾岸から内陸に向かった一族は大和政権の重臣となり、信濃に向かった一族は安曇郡を開拓し、諏訪大社下社にその痕跡を残したという。ところで「安曇族」が此処を本拠とした証拠は本当にあるのだろうか。

「和名抄に志珂・阿曇郷の二郷を載せている」「古史にいふ難縣、漢史に所謂倭奴国に當り、早くより漢土と交通した」「志賀島に祀られたのが延喜式に出る志賀海神社三座である」「旧事記にも阿曇連等の齋祠る筑紫の斯香神とある」「神代記事の海神国を志賀島又は対馬の辺りに擬し、海神の發祥地をその間に求める説を生ずるに至ったのは無理のないところ」といったほとんどが時代状況や神話からの推測だけである。阿曇郷や志賀海神社の記述は平安時代のものであるが古い伝統があることは確かだろう。それにしても奴国時代にまで遡るとなれば磐井の乱や邪馬台国、倭国大乱など様々困難な時代状況との整合性を説明しなければならぬ。とても不可能な話である。志賀島周辺が「安曇族」の本拠だとする根拠はきわめて薄弱であると言わざるをえない。

4. 「安曇族」は本貫を一つにせず、全国に分散して定着した

安曇族の分布は、西日本を中心に広域に及んでいる。章内の分布リストからも同じ海人族の宗像氏などが一地域で定着しているのとは対照的に、確かに本貫と言ひ得る規模の郡郷に安曇部が分布しているのがわかる。しかしここでも使われている資料は奈良時代以降のものであり、畿内を除けばそのほとんどが安曇部であることに留意しなければならない。安曇氏は応神天皇期や物部大連・蘇我大臣時代、朝廷内で力を振るった時期がある。領土拡張の野心が芽生えた時期をこの頃に比定することに不都合はない。なぜなら海部郡や海部郷の数の

多さに比べ安曇郡や阿曇郷の数はわずか4つに過ぎないからである。近江国阿曇郷に至ってはその所在すら不明であり、宮地氏も何の考察もしていない。吉田東伍氏(『大日本地名辞書』1907)は近江国伊香郡阿曇郷の安曇は「阿渡知と訓むべし、信州安曇郡とは全く相違す」という。確かに琵琶湖周辺に阿渡(アド)水門や安曇(アド)川はあるが、アヅミと読む地名はない。アヅミからアドに変化したという説もあるが、逆のパターンにも思いを致す必要があるのではなからうか。そもそも古代に安曇を「アヅミ」と訓んだか否かもわかっていないのだ。ちなみに阿曇郷のあったと推察される阿閉地域には「天造日女命」を祭神とする乃伎多神社がある。

また宮地氏は「アマ、アマベの氏族名や地名は何れの系統にも占有ではなく海人の汎称として使用せられた」とし、海部郡、海部郷の中にも安曇族が建てた郡郷があると言いたいようである。しかし海部が海人の汎称であると言うなら大勢力を誇った尾張氏の海部、丹波国造家の海部直氏の海部をはじめ宗像・大倭直・鰐・息長・紀・加茂・物部・吉備など安曇氏以上に強い勢力を持つ豪族の海部は限りなく存在したと思われるので、戸籍に安曇部の載る海部郡や海部郷以外を「安曇族」進出地として期待すべきではないと思われる。

5. 「安曇族」の定着地には安曇・阿曇の他、厚見や渥美の地名が残っている

前項に関連して、「安曇族」の進出した地域には海部や海土、安曇・阿曇、厚見・渥美などの地名が付けられたとされている。海土、海部については前項の通りだが、「アヅミ(温海・熱見・厚見)アタミ(熱海・阿潭)アクミ(飽海)などの地名については国語学上の調査を待たねばならず、この点が解決つかない限り根本原由を明めることが出来ず曖昧模糊の感の伴ふを免れない」とし、渥美・厚見などについては宮地氏自身にも確信があるとは言えない様だ。それでも渥美・厚見にこだわるのは吉田東伍氏や太田亮氏など先人達に押されてのことと思われる。

6. 「安曇族」には黥(刺青)や珠玉を愛好する習慣がある

安曇連浜子が謀反の罪に問われた際、黥するの刑に処せられ、これを時人が安曇目と言ったとする日本書紀の記事。そして魏志倭人伝に言う黥面文身の習慣が北九州地方には一般的であった点から類推し「安曇族」にもまた刺青する習慣があったとしている。北九州のみならず黥面文身の習慣は東南アジアで一般的な習慣である故、上古日本の土俗文化の中でも普遍的な現象であったと思われる。仮に刺青が安曇族の文化であったとしても、200年の時間と400kmも離れた淡路島や大阪湾岸地域の「海人の幸」との繋がりをどう捉えたらよいのだろうか。

宮地氏は他に安曇族の文化として「珠玉の愛好」に触れ次のように言う「玉を愛するは古代人に普通の習わしで、その事例の珍しくない間にあつて海神族にはとくに顕著であったと察せしめる節がある。」そして豊玉姫・玉衣姫の神名などを例示しているが、その説明は抽象レベルを出していない。「とくに顕著」な習慣とはどのような習慣なのであろうか。安曇族の玉への傾倒については信濃安曇族への関心や考察より感得された可能性が高いと思われる。次章では大場磐雄博士の考古学的研究から得られた成果も強力に援用している。

(信濃安曇族の考察から)

7. 「安曇族」は金属器使用の先駆者であり、銅鉾・銅剣を保持した

第二章においては信濃安曇族の詳細な活動振りや遺跡状況が紹介され、安曇族の性格付けもより鮮明になされている。考古学的な調査結果はその大半を大場博士に負っていると思われる。「大場氏の意見を聴くに」と前置きしている。それによると金属器の使用、端的には銅鉾・銅剣・銅戈の分布が安曇族の行動圏と一致しており、長門・出雲・伯耆・丹後を経て越後に至る所々に発見されているという。また発見地は安曇族の移住地を辿る有力な支証であるという。

『穂高神社史』の出版と軌を一にして昭和24年『信濃』に発表された大場氏の論文「信濃国安曇族の考古学的一考察」には北安曇郡平村海ノ口鎮座上諏訪社の神宝「銅戈」が写真入りで掲載されている。尤もこの銅戈の発見地は明らかではなく、新潟方面からもたらされた可能性もあるというが、近隣からの発見であれば、信濃安曇族の重要な移住証明になるのだという。

一方、大場氏といえば、海神族と玉との特別な関係を論じた論文「玉依比売命神社の児玉

石」(昭和16年)がある。折口信夫の影響を受け「玉=魂」とみなし、子持ち勾玉(児玉石)はとくにその呪力が強調されたものとみなす。さらに玉依姫の神名に関わる地名・神社の考察から、玉と海人族との結びつきを強調し、穂高神社や氷鉋斗女神社などの神社所在地、海部郷など海部系地名の存在に注目して積石塚古墳の分布と海部族の分布の一致を説いた。

宮地氏もこれに関連して「安曇族が宝玉との所縁の深い点に立脚し、之を越後の糸魚川下流小滝付近に硬玉の原産地の発見された事実と結んで、彼らの移住の原因を説かうとする試みも提起せられている」ことを紹介している。

8. 「安曇族」信濃への移動は北九州より長期間継続して行われた。その時期は上古に遡る

『穂高神社史』第一章において「安曇族」の存在年代はやや漠然としたものとして論じられてきた。実はこの漠然とした態度にこそ戦前の宮地博士渾身の配慮が滲んでいると私は考えている。

宮地博士は学生時代より実証史学を志したと言われるが、史学の実証性をとことん突き詰めていくと当然のことながら神話との齟齬が生まれてしまう。国家の神社行政の担当官でもある宮地氏が海神の存在年代と神武天皇の即位年代に矛盾が生じないように配慮するのは当然の責務であろう。

ところが第二章「安曇族」の信濃入りに関しては大場磐雄博士の考古学的知見を取り込み、その年代的な位置を弥生時代以前まで確信を持って遡らせようとしているように思える。国家に遠慮することなく実証性だけを追及しようとする心がわりでもしたのであるだろうか。第二章の最初の方で氏は次のように言う「安曇族のその諸国に移住をはじめた上限は恐らく先史時代にまで遡らせられるであらう」と。「先史時代」という言葉には神武天皇即位以前という意味も含まれているのだろうか。

それにしても第一章とのこの微妙な態度の差はいったい何を意味しているのか。『穂高神社史』の執筆は戦前から依頼を受けていたと言われているが、出版されたのは昭和24年、戦後のことである。宮地博士が原稿の執筆、推敲中に穂高で突然逝去されたため、ご家族の手により出版される運びとなった。氏の心の変遷は測り知れないが国家神道の最前線にいた方であるから、大きな体制変化に何かを感じ取られたのかも知れない。

またこのことに関連して、宮地氏は「奈良時代の昔に於いて氏族名を負う一郡の設置せられるまでには長期の準備を要し、久しい以前より郡内に勢力が養われていゝたとしなければならぬ。」とし、安曇族による安曇郡の開拓が「上代も古い時期」より行われたのは当然であると言う。比較的新しい時期から開拓を始めた氏族の氏族名をもって郡名に当てられた例があるにもかかわらず何ゆえこのようなことを述べられたのだろうか。誰もが首を傾げなくなるこの強気の論述に実は「安曇族」誕生に関わる真の意味が隠されていると考えたいのである。

内務省神社局と「安曇族」概念のルーツ

宮地博士は東京帝国大学文学部を卒業後、明治42年(1909)内務省神社局に神社考証官として入局。社格認定など国の神社行政の中心的役割を担った。大正11年(1922)国学院大学教授、大正13年(1924)神社局考証課長、昭和13年(1938)東京帝国大学教授を歴任。大正4年(1915)には明治神宮造営局参事として明治神宮の創建にも携わった他、昭和10年(1935)紀元2600年祝典準備委員会囑託にもなった。昭和21年(1946)GHQ占領下、内務省解体にともなう神社処分に関わって神社本庁の創立にも立ち会っている。研究者として官僚として、終始一貫国家神道や神社行政の中核から日本の近代化を精神面より支え続けた人生であった。

実証研究と国家神道。科学と神話。両立し難い領域を学問的かつ政治的に融合を図って行く、その困難さは想像するに難くない。現実と神話が最前線で交錯する弥生時代の扱いをめぐっては熾烈を極めたであろう。時は弥生文化や縄文文化の発見。日本の人類学・民俗学が創始されるなど先史時代への興味の窓が開き始めた時代であった。

歴史と神話の矛盾が融和されるためには縄文晩期から弥生初期・中期の扱いがきわめて重要となる。「安曇族」誕生の鍵はそのあたりにある。しかし「安曇族」の歴史的事実性を証明することは物証の少ない時代故、状況証拠を積み上げてゆくほか術はなかったであろう。それ故、当時同僚として内務省神社局に奉職していた大場磐雄氏や太田亮氏らの研究成果を大いに活用し「安曇族」概念の強化を図ったものと考えられる。

国学院大学の中村耕作氏(平成22年 国学院大学「研究開発機構紀要」第2号所収「『古代

学』としての考古学・『神道史』としての考古学)は『穂高神社史』第二章において銅鉾・銅剣・銅戈や海人の分布を示すことで安曇族の穂高地域への移動年代や移動ルートを示し、北信地域における安曇族の移動の証拠を挙げるにあたって大場氏の諸説を容れたことを指摘する。宮地氏の「氏族」と「神社」を結びつける文献学(実証主義)と遺跡発掘の成果を神社史に結びつける大場氏の考古学とが結合し「安曇族」概念はより強固なものになった。その際、彼らの氏族論が同じ内務省神社局にいた太田亮氏の氏族研究に多くを負っていた可能性があることも中村氏は指摘している。

『神道講座』所収「氏神の発達」(太田亮昭和4年)では全国の安曇関連地名(渥美・厚見も見える)の他、穂高神社、氷鉦斗女神社など安曇関連の神社も挙げられており、宮地氏・大場氏の研究基礎データはこれに負っていた様子が窺える。尤もさらにそのルーツを探すと、歴史学者吉田東伍氏の『大日本地名辞書』(明治40年)に行き着く。渥美・厚見地名も安曇関連と書かれているが、やはりその根拠は不明である。

「安曇族」という用語使用のルーツだけを追っていくと、宮地氏においては『諏訪史』第2巻(昭和6年)での使用が一番早い時期のものであると思われる。さらに遡ると太田亮氏が『日本古代氏族制度』(大正6年)の中で初めて「安曇族」という一節を立ててこれを説明している。この著作は大学卒業後初めて著した太田氏の事実上の処女作であり、我々の知るところでは最古の「安曇族」使用例ということになる。

この本の目次をめくると「第5編 地方制度」「第二章 曾長時代」の「第10節 安曇族」とある。「曾長時代」というのは、大和政権が誕生する前の統一されない地方政権の時代、或いは多少の侮蔑を込めて未開民族の支配した時代、その程度の意味であろう。(大正13年の著作『日本国誌資料叢書』『信濃』では曾長時代を崇神天皇以前としている)節は17あり、順に「土蜘蛛」「国栖」「佐伯」「八握脛」「蝦夷」「蝦夷人の氏姓」「熊襲」「隼人」「出雲神族」「安曇族」「山祇族」「天孫裔氏族」「天神裔氏族」「帰化族」「皇別氏族」「曾長時代の政治」「曾長の末路」と続いている。土蜘蛛から隼人まではいわゆる蛮族であり、出雲神族、安曇族、山祇族は国津神を祀る地祇裔氏族ということになる。節の並びは皇室との親和度の濃淡によって順序付けられているようだ。安曇族は神話上皇室の姻戚ではあるが、ここでは当然先住民族の末裔なのでこの位置となる。お気づきのように地祇裔氏族はすべて「oo族」で統一されている。曾長や「oo族」といった言い回しは初期の人類学で頻りに用いられ、柳田國男も使用していることから、この時代のポピュラーな言い回しであったのかも知れない。

それにしても「山祇族」(こういった人々が存在したかどうかについてはここでは触れない)に対応する概念は「海神族」のはずなのに太田氏は何故「海神」ではなく「安曇」を使ったのであろうか。このような名付けになった原因はまさに本文の説明部分にある。

「第10節 安曇族」より

安曇族は「綿津見神の子孫と伝えられる」「筑前国糟屋郡阿曇郷がその根拠地」「志賀島より徳川時代、漢倭奴国王金印が取り出された」「安曇即海神族の建てた儼国がいわゆる奴国である」

さらに前述の『氏神の発達』では「奴国王と云うのはその実が国史の安曇氏である」と明瞭に断定する。海神の子孫=安曇族=奴国王の図式が意味するのは海神族の中の海神族、海神族の王、海神の正統継承者。すなわち固有名詞の「海神族」と「安曇族」はほぼ同義なのである。一方で、こうした意味構造が「安曇族」に託されたということである。ひとたび安曇族=海神族、安曇氏が海神族の王ということになると、安曇郷は奴国の王都となり「笠紫の日向の橘の小門の阿波岐原」も「海神の宮」も志賀島周辺に擬定され、憶測が憶測を呼び「安曇族」の概念は限りなく広がって行くことになるのだが、それは後々の話である。

ところで太田氏が「安曇」という名称を選び、「海神族」の別称としたその根本原因は「阿曇郷」(和名抄高山寺本「阿曇郷」)にある。その名称は飛鳥時代から奈良時代にかけて確かに存在したであろう「安曇連」「安曇宿禰」に因んで付けられたものだ。だから飛鳥・奈良の時代から遡及して便宜的に安曇の名が付与されたと考えてよいだろう。つまり安曇連の祖先だから「安曇族」と仮に呼んで置こうというのである。

時代は下るが、太田氏においては労作『姓氏家系大辞典』（昭和17～18年）に著名である。これを含めこの時期の著作では不思議なことに「安曇族」ではなく「安曇氏」だけを用いている。奴国時代においても「安曇氏」の呼称だけが用いられ、その一方で「安曇氏=奴国王」との推断は影を潜めている。ただ一箇所だけ『姓氏家系大辞典』の中で信濃の安曇氏についてのみ「安曇族」と表記された部分がある。これは時期的（昭和17年）に見て宮地氏の「信濃安曇族」の性格付けに倣ったものと思われ、いわば逆輸入である。さてそれではいつまで「安曇族」の呼称が積極的に使われていたのだろうか。

大正13年刊『日本国誌資料叢書』『信濃』の中に「安曇族」の小見出しが、大正15年刊『諏訪神社史』に「八坂刀売命は信濃安曇族の方」との記述が見える。しかし昭和3年刊『日本古代史新研究』昭和4年刊『日本上代に於ける社会組織の研究』ではそのすべてが「安曇氏」となっており、「安曇族」の語は見えない。それ以後も太田氏はなぜか「安曇族」の名称をほとんど使っていないのである。強弁する必要がなくなったからなのか、あるいは何らかの理由により放棄されたのか。一方、宮地氏が「安曇族」の概念を使い始めるのは昭和6年、ちょうどこの時期に当たっている。このことは単なる偶然と見做してよいのであろうか。

ともあれ『日本古代氏族制度』で示された「安曇族」の概念既定、および性格付け、そしてその後の経過はそれが新造語である可能性を強く示唆している。すなわち、「安曇族」という存在そのものが、このとき初めて創作された可能性が高いと思われるのである。

太田亮氏の「安曇族」、「曾長時代の安曇氏」について

太田亮氏における「安曇族」概念、同じ意味で用いられた昭和三年以降の「曾長時代の安曇氏」についてさらに概要を整理しておきたい。

太田氏の「安曇族」概念は氏が曾長時代と呼ぶ弥生時代まで遡り、北九州の一角志賀島に海神を祀る奴国王にそのルーツを求める。この地はかつて難縣と呼ばれ、国郡制が敷かれてからは筑前国糟屋郡阿曇郷（阿曇郷）が置かれていた。「安曇族」はこの後安倍氏系の筑紫国造（筑紫君）にこの地を譲り、自らは阿波国名方郡に本拠を求め遷居したという。（名方は難縣に由来、とする）時同じくして一派は信濃へ、もう一派は壱岐・対馬へ移動し拠点築いたとしている。

この他にも安曇氏の海部は各地に植民したが、在地の豪族に奪われ、安曇氏に所属する海部は信濃の海部だけになった。安曇族が信濃に移動した形跡は、安曇郡や海部郷などの地名、穂高神社や氷鉦斗女神社、玉依比売命神社など海神系神社の存在より遡って推測することができる。また、諏訪社の妃神八坂刀売命は信濃安曇族の出身と伝えられ、建御名方命の「名方」は阿波国名方郡に由来する故「安曇族」は諏訪社の建神にも深く関わったとしている。諏訪社と安曇族の関わりについては、川会神社社伝や信府統記旧俗伝の泉小太郎伝説を引いて説明に加えている。

太田氏にあっては「安曇族」の誕生、遷移、定着、そのすべてにおいて遡及的推測に頼っており、その時間幅も500年～1000年という長大なもので信憑性は極めて低いと言わざるをえない。そして、『穂高神社史』において宮地氏の行った「安曇族」の定義づけにも、太田氏の影響が深く感じられ、「安曇族」概念への疑いはいよいよ濃くなってきた。

「信濃安曇族」の誕生

太田氏による「安曇族」概念の発表から十数年、それは宮地直一博士の知るところとなる。そして、この用語が新たな想定の下、再利用される時がやって来た。

昭和6年発刊『諏訪史』第2巻。諏訪社建神に絡み、「安曇族」がこれに関与した旨、および諏訪神族の信濃定着に先立ち、すでに安曇系海部族「安曇族」が信濃に定着していたという推断を披瀝している。こうした考えの元になったのは言うまでもなく太田氏の『諏訪神社史』（大正15）であろう。重要部分に太田氏の考えを踏襲する部分が散見されるからである。

それにしても何故諏訪神族に先立ち安曇族が信濃に定着していたとする必要があったのだろうか。

『諏訪史』では「（諏訪）建神以前海部族により（安曇野）は開拓されていた」という樋畑雪湖氏の説を引いたり、「最初の開拓者は海部系部族で彼らが移住を始めたのは遙か古代に属し、恐らくは先着のアイヌ族と接触する位の古さに遡る」という俗説を紹介しているが、その実なんら物証があるわけでもない。事に依ると「安曇郡」が信濃に置郡されたこと、穂高

神社や氷鉋斗女神社などが存在することなどから遡及し、その古さを強調する太田氏の「安曇族」概念をさらに遡らせて利用しようと試みたのかもしれない。

『穂高神社史』第二章にもこのような一文がある。「奈良時代の昔において氏族名を追ふ一郡の設置されるまでには長期の準備を要し、久しい以前より郡内に勢力が養われてゐたとしなければならない。随つてその起源を上代も古い時期にかくべきは当然で、一方隣郡諏訪に拠つた諏訪神族との関係に徴しても、---中略---安曇野の最初の開拓者として、他に先んじて定住し得られた古代に置かねばなるまい。」

その一方、安曇野の弥生式遺跡の少ないこと貧弱であることについては、安曇族の主力は松本にいたと推測し、穂高古墳群の規模の小さいこと時代の新しいことに関しては、水葬やその他特殊な方法で埋葬されたとの推断を下している。

何故これほど安曇族信濃入りの古さに拘り、これを誇張しようと執心するのか。その真意は測りかねるが、安曇族信濃入りの古さを証明することは、少なくとも九州安曇族の古さも間接的に証明することになるので、さらに姻族である皇室の古来悠遠さを誇張することにもなりえそうである。

実証史学を志したとされる宮地博士だが、一方で国学者にも師事して、その信仰心は篤いものであったという。信濃安曇族誕生に絡んでは太田氏が筋書きし、宮地氏が生を吹き込んだと言ってもよいだろう。その動機は何であったのか。信仰心からなのか、それとも官僚としての義務感からなのか。

欠史八代と安曇族

古事記、日本書紀において事績の存在しない系譜のみの第二代から第九代までの八人の天皇(綏靖 安寧 懿徳 孝昭 孝安 孝霊 孝元 開化)を欠史八代という。現在の歴史学ではこれらの天皇は存在せず、後世になって創作された存在と考えられている。こうした考えを初めて提唱した津田左右吉氏は不敬罪に問われ1942年有罪判決を受けている。墳墓も厳密に比定できないこれら天皇の時代こそまさに弥生文化の時代なのである。

明治政府は、明治五年(1872)神武天皇の即位した年を記紀の記載や辛酉思想の影響などから西暦 B. C660年と定め、その年を皇紀元年とした。そのため欠史八代の上皇を含め初期天皇の統治時代が弥生時代から古墳時代草創期に重なることとなったのである。

政府はこれら天皇の実在性を高めるための様々な研究を期待したであろう。弥生期の上皇の実在性を高めることはできずとも、大和政権を支えた古参の氏族の存在とその活動史を明らかにすることで大和政権のこの時代への間接的な関与を仄めかすことはできよう。奈良時代には阿曇郷(阿曇郷)が弥生文化の先進地北九州に置かれていたことから、安曇氏に白羽の矢が立ったことは容易に想像できる。ただし「安曇族」の存在年代を B. C660年より古い時代まで遡らせてしまうと新たな矛盾を産む恐れがあるため、神武即位ころが上限である。

敗戦と「安曇族」幻想の拡大

太田亮氏によって考案され、宮地氏によって新たな存在価値を与えられ、大場氏によって概念補強された「安曇族」は戦前すでに史学タームとして確立されていた。しかし敗戦により決定的な変節を経験することとなる。

『穂高神社史』においては皇国史観や儒教思想を引きずった表現、弥生時代への過度の拘りも見えたが、戦後民主主義と古代史ブームが到来すると「安曇族」概念も戦前のイメージを払拭し、考古学の一角を占めるようになった。これを最も歓迎したのは地方史・郷土史の研究者であろう。発掘によって遺物は出るが、これを作った人々の生活ぶりは見えてこないからだ。地域を繋ぎ、古代史の空隙を埋め合わせてくれる「安曇族」はまさに古代史のヒーローとも言える存在になった。そしてその概念は一人歩きを始め、活躍する領域を徐々に広げて行ったように思える。

当初、「海神族」は「安曇族」のみであったが、太田氏自身や宮地氏・大場氏により白水郎や海部族と混同されるに至り、尾張連や海部直の海部(あまべ)、倭直や青海首、倭太氏の海部(あまべ)、磯部氏なども混同され、近年ではその他すべての海人や海民、海夫と観念的に融合されて話題に上ることが多くなってきた。それどころかさらに時代を遡り、邪馬台国時代の海人や稲を携え中国大陸からやってきた最初の弥生人までもが「安曇族」の文脈で語られるようになっていく。固有名詞だった「安曇族」が海部族と同じ一般名詞に近い使われ方をされるようになったことは大きな変化である。

そもそも「安曇族」という概念には背景となる国家観も階級分化も人口論さえも存在していない。だからこそ明治の国家神道下で都合よく利用され得たのだといえる。この使い勝手の良さが戦後の歴史解釈においても利用されるきっかけとなったのは言うまでもない。

戦前の、神話=史実と捉える国家神道の文脈から解放されると、新たな古代史観の下、無辺・無時間の「安曇族」が誕生することとなる。今や考古学や地方史においても、さらに民俗学や人類学においてさえ大活躍の「安曇族」は、デジタル技術や情報通信の発達に伴い拡大拡張を続けている。そこから生み出される幻想は古代史ロマンなどと呼ばれ観光資源として大いに利用されるようになっている。

新たな課題

昨今、特にこの10年くらいの間、コンピューターの性能向上とAI開発にも助けられてゲノム技術が飛躍的に向上している。これにより大陸と縄文人・弥生人・現代日本人の関係も徐々に明らかになりつつある。もはや「安曇族」という観念に縛られず、日本人のルーツ論に合流するときが来ているように思う。

一方、安曇氏や安曇部が衰退した平安時代以降も、彼らの流れを汲むと思われる人々が、朝廷の儀式や貢納関係において、あるいは朝廷や幕府と独立した形で水軍・海人・海夫・海民として、その文化を後々の世代にまで継承し続けている事例が報告されている。安曇氏が歴史から消え去った後も、近江や難波を中心に内膳司御厨はさらに発展し、源氏と結びつきを深める中で徐々に独立性を高め、戦国期には水軍を率いて時の政権にも多大な影響を与えている。

江戸期には不幸にも身分制度のさらに外に置かれ、あるいは困り込まれて、過酷な差別にさらされている。喜田貞吉博士は「海人への賤視」の起源を古代に求める。しかしこれを受け継ぐ研究や近世近代の民衆史を安曇氏族の視点から捉えこむような研究は現代に至るまでほとんどなされていない。

そして信濃においては、「安曇族」移住の期待に反し、古代の安曇野開発は近隣地域に比べ遅れをとっていたことが遺跡の発掘状況より明らかになっている。安曇郡設置の理由を「安曇族」に帰すことができないのであれば新たな理由を探さなくてはならない。

新たな安曇研究は始まったばかりである。

宮地直一氏 略歴

- 明治19 (1886) [高知県高知市](#)出身。
- 明治41 (1908) 東京帝国大学卒業、大学院進学
- 明治42 (1909) 内務省入省 (神社考証担当)
- 大正1 (1912) 神社調査委員
- 大正4 (1915) 明治神宮造営局参事
- 大正7 (1918) 東京帝国大学文科大学講師 (神祇史)
- 大正8 (1919) 史蹟名勝天然記念物調査会考査員、神社局考証官
- 大正11 (1922) 國學院大學教授 (神祇史)
- 大正13 (1924) 神社局考証課長
- 昭和4 (1929) 神社制度調査会幹事、台湾総督府神社行政事務嘱託
- 昭和10 (1935) 紀元二千六百年祝典準備委員会嘱託
- 昭和13 (1938) 東京帝国大学神道研究室主任教授 (神道講座)
- 昭和15 (1940) 勲三等瑞宝章
- 昭和16 (1941) 正四位
- 昭和21 (1946) 東京帝国大学退官、神社本庁顧問、国民信仰研究所創設 (所長)

昭和24（1949） 調査先の長野県穂高にて急逝する

大場磐雄氏 略歴

明治32（1899） 東京市生まれ
大正11（1922） 國學院大學卒業・神奈川県立第二横浜中学校着任。
大正14（1925） 内務省神社局考証課嘱託となる（課長宮地直一）。
昭和10（1935） 國學院大學学部講師
昭和12（1937） 「子持勾玉私考」
昭和16（1942） 「玉依比売命神社の児玉石」
昭和23（1948） 学位取得（「祭祀遺蹟の研究」）。
昭和24（1949） 國學院大學教授就任、「信濃国安曇族の考古学的一考察」
昭和41（1966） 國學院大學に考古学専攻を設置。
昭和45（1970） 定年・大学院客員教授、日本考古学協会委員長。
昭和50（1975） 著作集刊行開始、逝去。『考古学上から見た古氏族の研究』

太田亮氏 略歴

大阪府吉野郡下市村（現・奈良県吉野郡下市町）に生まれる。
京都法政大学予科（現・立命館大学）を経て、
明治43（1910） 神宮皇學館（現・皇學館大学）卒業。
山梨県立女学校教諭、内務省考証官補、同嘱託などを経て、
昭和9（1934） 立命館大学講師。
昭和15（1941） 同教授。文学部長を兼ねた。
昭和20（1945） 「日本上代ニ於ケル社会組織ノ研究」で法学博士号取得。
昭和24（1949） 近畿大学教授。
昭和30（1955） 専修大学教授。講義の帰途に突然路傍で倒れ、心臓動脈硬化症のため死去。